

# プロ野球西武のコーチ像変革 脱経験則、主体性引き出す

2024/09/19 05:00 日本経済新聞電子版 1425文字

プロ野球の埼玉西武ライオンズが旧来のコーチ像の変革に取り組んでいる。現役時代の経験則を頭ごなしに教え込むのではなく、昨今のビジネス現場に通じる部下とのコミュニケーションの手法を指導者らが学び、選手の主体性を引き出すマネジメント能力の習得を目指す。コーチング技術に着目した取り組みは球界では珍しく、指導者自身の成長も促すことで育成力の底上げを図る。

「結果を出すにはどうしたらいいのか。まずはコーチ自身の思考の質を高め、行動の質を高めていく必要がある」。8月中旬、マネジメント研修の講師の言葉に、西武の2軍のコーチや球団スタッフら約10人が熱心に耳を傾けた。

2時間超の研修では「組織の成功循環モデル」など、ビジネスの現場も取り入れるチームビルディングの知識が示された。重点的に学んだのが、選手の主体的な姿勢を引き出す「承認」、選手の現状や考えを把握する「傾聴」のスキルだ。

意識して良い点を褒めたか、選手の話を守るなどコミュニケーションが一方的でないか——。コーチ役と選手役に分かれる実践的な演習では、選手への声のかけ方や視線一つにも気を配る。練習の狙いを言語化できているかなどを互いに確認し合った。

西武は一般企業に研修プログラムを提供するチームボックス（東京・港）に協力を仰ぎ、指導者向けの研修を年4回ほど実施。2020年以降、ファームのコーチら約60人が受講した。

球界では現役時代に実績を残した選手がコーチに就くケースがほとんどだが、良い選手が良い指導者になるとは限らない。そんな積年の課題にメスを入れる目的があり、今ではチーム内に「コーチとして歩むならば学ばなければダメだ」という意識が浸透したという。

指導者主導の組織文化が根強い球界にあって、選手が主体的に意見を出しやすい環境づくりを目指す。研修を担当するファーム・育成ディレクターの真山龍は「経験則による頭ごなしの指導は選手に響かない。指導方法をアップデートし、選手との共通理解のもとで課題に取り組むことが大切」と指摘する。

研修の導入によって増えたのが、ミーティングなどでの選手との会話量だ。選手との信頼関係を築くことにつながり、コーチも自信をつけている。



プロ野球・埼玉西武ライオンズではコーチらを対象にチームボックスの指導者研修を実施する（埼玉県所沢市）



コーチ役と選手役に分かれる実践的な演習では、選手への声のかけ方や視線一つにも気を配っているか、練習の狙いを言語化できているかなどを確認し合った（埼玉県所沢市）

主に3軍選手を指導する育成担当兼人財開発担当の木村文紀は、練習でも意図的に褒めることを心がける。当初は落球を怖がる外野手がいたが、前向きな言葉を掛けることで「『守備が楽しい』と話すところまで成長させられた」と手応えを口にする。

指導歴10年超の2軍内野守備・走塁コーチの黒田哲史は、指導に付いてこられない選手はそれまで、との考えを改め「選手の考え方を換えれば行動は変わる。根気強く寄り添いたい」と話す。入団3年目の内野手、滝沢夏央は「自分の考えを尊重し、間違っていれば軌道修正してくれる。『腹落ち』して練習できる」と信頼を寄せる。

西武はリーグ戦で最下位に沈み、負け数では12日に歴代球団ワーストとなった。一方、飛躍が期待される選手が集う2軍はイースタン・リーグで首位争いを演じている。ファームの好調さとコーチの変革は無縁ではなさそうだ。

チームボックスの社長で、スポーツ界の指導者養成にも取り組む中竹竜二氏は「世界の潮流である主体性を引き出すコーチングが日本の指導者にも求められる」とした上で、「データ分析による対策が広がり、『こうすれば打てる』というような単純な答えはない。常に自分で考えて変わっていく力が必要だ」と話している。

(佐藤淳一郎)

許諾番号30100594 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報(以下「情報」)の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.